



**0: 背景**

0.1. 動機

西成区出身という出自を笠に着て、釜ヶ崎で  
スラムツーリズム的態度を取ってきた自分への批判

0.2. 参考文献

へまなざしの権力論

**1: テーマ**

建築によって「見る」という行為の暴力性を提示する

スラムツーリズムへの批判を行う  
→スラムツーリズムにおける「へまなざし」の概念に注目し、「見る」という行為の暴力性を提示する  
→建築によって、「見る」という行為が主体に運んでくるような操作を行う  
→主体が見ようとするほど見られる空間をつくる

労働者の居場所の閉鎖・建替

行政による再開発事業への批判

**2: 手法**

"contropticon" という新概念  
を用いて空間を設計する

CONTROPTICON

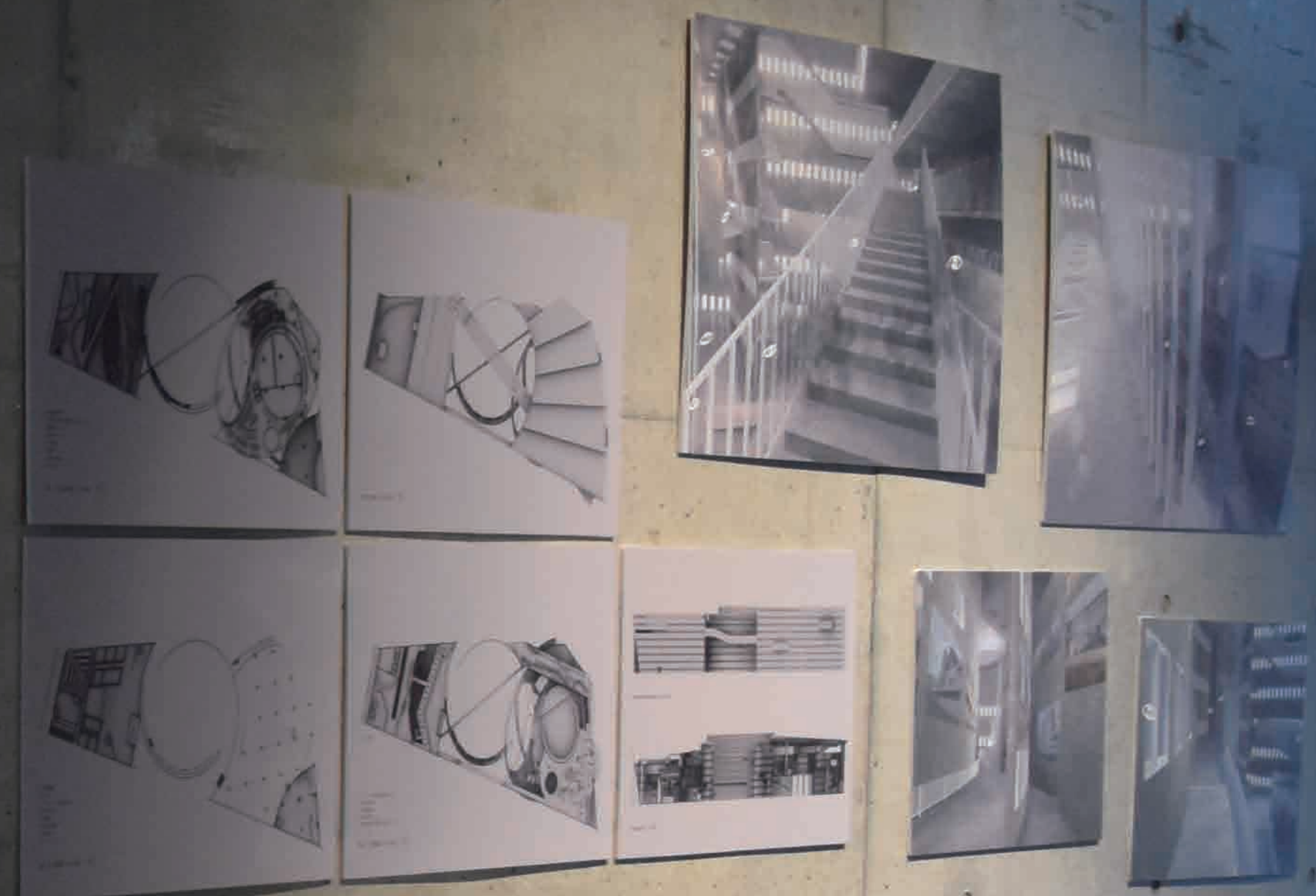
2.1. 手法

2.2. 見る・見られる関係の考察

2.3. 釜ヶ崎の空間要素

**3: プログラム**

見る見られる関係が軸となる空間設計



平川礼子 | 「見せモンとちゃうぞ！」



# 「見せモンとちやうぞ！」

その言葉は私の奥底で見過ごされていた罪の意識を明るく照らし出し、二度と目を逸らすことを許さなかった。



# 0：背景

## 0.1. 動機

出身地である大阪市西成区  
の釜ヶ崎を敷地にすると決め、  
NPO のボランティアをしたり  
現地の人たちにインタビュー  
をしたりといった活動が続け  
てきた。しかし調査を続ける  
中でどこか後ろめたさや違和  
感を感じている自分に気づい  
た。その正体は、自分の好奇  
心や研究のために一方的に見  
たり聞いたり知ったりといっ  
た、スラムツーリズムにも似  
た搾取に対する罪悪感であっ  
た。自己のアイデンティティ  
形成の過程で釜ヶ崎に対する  
スティグマを一部内面化して  
きたこともあり、現地調査に  
際しても自分が西成出身であ

ることを強調してきたが、  
フィールドワークを続ける中  
で、自分は西成区民であって  
も釜ヶ崎におけるいわゆる当  
事者ではないということを強  
く自覚した。

釜ヶ崎は、男性単身労働者  
が人口の多くを占めるとはい  
え、様々な背景を持った多様  
な人々が生活する・訪れる地  
域であり、全てを考慮してひ  
とつの答えを出すことは現実  
的に不可能、だからといって  
何かひとつを選ぶということ  
もしたくなかった。これ以降、  
釜ヶ崎の人々を対象とする無  
責任な提案はできなくなり、  
釜ヶ崎に対して誠実であるた

# 西成区出身という出自を笠に着て、釜ヶ崎で スラムツーリズム的態度を取ってきた自分への批判

釜ヶ崎	スラムツーリズム	スラムクリアランス
全国最大の日雇い市場があると言われる街。大阪 市西成区にあり、ミナミ の歓楽街から 2km ほど隣 の面積 0.62km <sup>2</sup> のエリア。 市はいりん地区の名称 を用いている。	貧困地区の訪問によって、 その社会や文化を体験的に 理解することを目的とした 観光のこと。好奇心をはじ め、娯楽や教育などの動機 があるとされているが、住 民の生活が見世物にされ商 品化されることをめぐり、 倫理的な観点から批判がな されてきた。	スラム化した居住地区を行 政や公共団体が主体となっ て再開発し、低家賃の公共 住宅をスラム住民に提供す る一連の事業を指す。主に スクラップ・アンド・ビル ドの手法が用いられ、地区 の土地を買収し、不良住宅 を撤去、そこに公共賃貸住 宅を建設する。



## 0.2. 参考文献

3 冊の参考文献について、＜まなざし＞という概念に基  
づいて整理する。＜まなざし＞とは、哲学、批判理論、美学、  
メディア研究、芸術批評、社会学、精神分析学などで、  
見ること、見られることを指す言葉であり、単に目で見  
るということのみならず、対象となるものをどのように  
認識するのにか関する特殊な意味合いをこめて用いられ  
る。見ることを人間関係における極めて重要な要素と見  
なし、他者を見ることによって主体と客体という関係が  
成立すると考える場合、ここで主体が客体に向ける目が  
＜まなざし＞と呼ばれる。

### 1. ミシェル・フーコー (1975) 『監獄の誕生』

ミシェル・フーコーは権力とま  
なざしに関する議論に大きな影響  
をあたえた。フーコーが提示した 3  
つの主な概念として、パノプティ  
シズム、知／権力、生権力があり、  
これらは全て監視システムの中で  
自己を規制することにかかわって  
いる。つまり、誰が、あるいは何  
が自分を見ているのか直接見る  
ことができなくても、常に  
見られているという信念のもとで  
人が自らの行動を修正するとい  
うことである。この監視は、実  
在しているように見えていなが  
ら、存在の可能性さえあれば人  
に自己を規制させる効果を及ぼ  
す。この著作でも、権力装置と  
しての監獄や学校における監視  
や自己規制など、さまざまな  
規律・訓練 (discipline) のメ  
カニズムと権力関係を明確に  
するために見ることと見られる  
ことの問題を探索し

ており、＜まなざし＞の権力論を扱った代表的な書物のひとつと見なされている。フーコーはこの著作において、ジェレミー・ベンサムが提案した、中心にある監視塔から囚人が監視することができるが、囚人のほうからは自分たちが監視されているかどうか確実に見ることができない装置であるパノプティコンをとりあげ、これを「見る－見られるという一対の事態を分離す機械仕掛」であり、「権力を自動的なものにし、権力を没個人化する」するものだとして述べている。

### 2. エドワード・サイード (1978) 『オリエンタリズム』

エドワード・サイードが最初に「オリエンタリズム」として言及した、ポストコロニアル理論におけるまなざしは、大国である宗主国が植民地化した国々へと広げた関係を説明するために用いられる。植民地化されたものを「他者」の位置に置くことで、植民者のアイデンティティを強力な征服者として確実に形作ることができる。ポストコロニアル理論におけるまなざしは「主体と客体の関係を確実にする機能」を持っている。サイードは、西洋列強のオリエンタリズムに基づいた学問的・実践的な知識が、権力と密接に関連しながら東洋に対する西洋の支配関係をもたらしていると論じ、オリエンタリズムを、東洋に対する西洋の思考様式であると同時に、支配の様式でもあると見なした。すなわち「知」と「力」が結合して、オリエンタリズムは支配の様式にもなる。

### 3. ジョン・アーリ、ヨナス・ラースン (1990) 『観光のまなざし』

アーリとラースンはこの著作においてフーコーを引用し、「まなざしという概念で言いたいことは、モノ・コトを見るということは、実は習得された能力であって、純粋で無垢な目などはないということである」と述べ、人々は「社会的に構成され制度化され」た＜まなざし＞を観光で遭遇したものに対して向けており、この＜まなざし＞が階級やジェンダー、出身地域、年齢、受けた教育などさまざまな要因によって規定されていることを指摘している。アーリは、「観光とは、日常から離れた景色、風景、町並みなどに対してまなざしを投げかけること」であり、近代人が身につけたのは、対象を可視的世界の客体としてのみ理解する「鑑識眼」という＜まなざし＞であったと指摘する。さらに、近代産業社会において、大量かつ高速な人・モノの長距離輸送が発達することで、観光の日常生活空間と観光地とが空間的に断絶したものとして経験されるようになった。こうした空間の断絶によって、観光地の景観を一方向的かつ客体的に消費する対象として捉える視線が広く生まれることになったのである。この視線は、対象とは別の地平から＜まなざし＞を投げかける事で成立するものであり、対象に一方的な意味づけを行うものであった。

これを踏まえ、スラムツーリズムにおける＜まなざし＞という概念に注目し、その批判のために「見る」という行為の暴力性を提示することにした。



右上：釜ヶ崎のかつての本宿街（1952年4月、『今宮町誌』釜ヶ崎資料センターEDより）  
右中：労働者向けの商店で賑わう釜ヶ崎（1958年6月、岸野啓吉撮影、釜ヶ崎資料センターEDより）  
右下：再開発事業によって違法商店やバラックがなくなった現在の釜ヶ崎（2013年10月、筆者撮影）  
左：釜ヶ崎の航空写真



## 0.3. 釜ヶ崎の歴史と現在

釜ヶ崎とは 1922 年まで摂津国・大阪府西成郡今宮村に存在した地名のこと。および現在においてその一帯を指す地域通称。現在では主に JR 西日本の大和路線（関西本線）の線路以南の西成区萩之茶屋 1 丁目・萩之茶屋 2 丁目の各一部を指す。1966 年以降、あいりん地区という呼称も与えられる。

19 世紀末のスラムクリアランスによって、江戸時代初期の旅籠に端を発する長町（現在の日本橋）の本賃宿街が釜ヶ崎に移転し、釜ヶ崎はスラム街となった。戦後、空襲で焼け野原となった釜ヶ崎に戦災被害者が集まり簡易宿所やバラックに居を構えた。1960 年代に入ると暴動が起きるようになり（1961 年第一次暴動）、家族世帯が地域外の公営住宅へ移り住ん

でいく一方で、1970 年の大阪万博に向けて全国から単身男性が集まった。1970 年にはあいりん総合センターが開設され、住民の大多数が日雇い労働者で構成される町へと変化していった。好調な景気と労働条件の改善によって求人は増え続け、簡易宿所は高層化、個室化した。1990 年代、バブルが崩壊すると求人が激減し、労働者たちが路上で生活する様子が見られるようになった。その後、適切な社会保障を求める NPO などが多く生まれ、生活保護を受けてアパートで一人暮らしをする高齢の単身男性が増えた。簡易宿所も福祉アパートや旅行者向けの宿へと営業形態を変更し、現在は海外からの旅行者も多く訪れるようになっている。



# 1: テーマ

## 建築によって「見る」という行為の暴力性を提示する

### 1.1. 目的

#### スラムツーリズムへの批判を行う

→スラムツーリズムにおける〈まなざし〉の概念に注目し、「見る」という行為の暴力性を提示する

→建築によって、「見る」という行為が主体に返ってくるような操作を行う

→主体が見ようとするほど見られる空間をつくる

釜ヶ崎における自分のふるまいを反省し、スラムツーリズムへの批判をテーマとした。その際、社会学や精神分析学で用いられる「まなざし」という概念に注目し、「見る」とを人間関係における特に重

要な要素とみなして、スラムツーリズムにおける「まなざし」の暴力性を提示することにした。「見る」という行為がその暴力性ととも主体に返っていくような操作を建築によって行うことができれば

それが達成されると考え、主体が見ようとするほど見られる空間というものをつくり、それによって建築を構成することを試みた。

### 1.2. 敷地とその意義

1970 年の竣工以降、約半世紀にわたり労働者を支えてきたあいりん総合センターはこの街のシンボリックな複合施設であり、労働福祉に関する様々な課題に対応してきた。センターの主な機能は、事業者と労働者間の求人求職活動が行われる日雇い労働市場（寄場）であった。早朝 5 時に 1 階のシャッターが開けられ、日雇労働者が集まり、関西圏やそれ以外の地域の会社の者により、土工や解体業などの仕事の求人活動が行われた。かつて建物の前には早朝から大勢の労働者が集い、現場に向かうワンボックスカーもまた多く並んだ。その日の仕事につけなかった者たちの憩いの場にもなっていた。ほかにも、労働者のための食堂やシャワールーム、職業紹介や労災・労働相談を提供する

西成労働福祉センター、職業安定所、そして上層階には病院と市営住宅が同居していたが、築 40 年以上を経て老朽化が進行しており、耐震性の観点から建て替えが決まった。

#### 労働者による抵抗と占拠

病院以外のスペースについては 2019 年 3 月 31 日をもって閉鎖されることとなったが、労働者側の抵抗によりシャッターを閉める事が出来ず、同年 4 月 24 日の機動隊を投入した大掛かりな労働者等の強制排除まで電気を遮断したままシャッターが開けられていた。建物の閉鎖後も数十人程度の路上生活者が「新施設で休息場所が失われる」として建物を占拠し、現在まで継続している。

## 労働者の居場所の閉鎖・建替



### あいりん総合センター (大阪府大阪市西成区 萩之茶屋 1丁目 11-15)

1970 年から事業者と労働者間の求人求職活動が行われる日雇い労働市場として機能し、食堂やシャワールーム、西成労働福祉センター、職業安定所、病院と市営住宅が同居していたが、老朽化を理由に 2019 年に閉鎖。行政による再開発事業の一環として建て替えが予定されているが、反対する路上生活者たちに未だ占拠されている。



左下: あいりん総合センターを、東側にある簡易宿泊所屋上から見下ろした図

上: 北側前面道路から見たあいりん総合センター

左: あいりん総合センター前で野宿する路上生活者たち

(大阪府西成区 2022 年 7 月筆者撮影)

## 行政による再開発事業への批判

2013 年から大阪府と大阪市の協働により、西成特区構想という再開発構想に基づいた事業が進められてきた。これは大阪府西成区を特区指定し、区が抱える諸問題の解決に向けた施策を推進するものである。日雇い労働者向けの簡易宿泊所や寄場が多数存在する「あいりん地区」を擁する西成区は、生活保護受給者や野宿

者、流入者の数が他の区と比較しても突出しており、生活水準の向上や治安の改善などが課題とされてきた。また、労働者の高齢化によって大阪市の中でも特に高齢化が進んでいるとされている。このような状況を改善するために、西成特区構想では、主に生活困窮者の支援、治安改善、結核対策、観光客誘致などの施

策が推進されてきているが、その施策のひとつとしてスラムツーリズムを推し進めるような取り組みが行われている。これに対する批判のため、渦中の問題であるあいりん総合センター建て替えの一案としてこれを提示することで、事業の推進によって生まれる問題の存在を示したい。

#### 西成特区構想

西成区の活性化とイメージアップのため、大阪市長だった橋下徹氏が提唱した構想。野宿生活者の雇用創出や生活向上、子育て世代を呼び込む優遇策などが掲げられ、特別予算をつけて 2013 年度から開始した。市は府や府警とも連携し、治安の改善

にも取り組み、釜ヶ崎を中心に薬物使用やゴミの不法投棄の根絶を目指した。しかし、衛生環境や治安が向上しても、いまだ数百人規模の野宿生活者がこの地域で極限的な暮らしを余儀なくされていることや、野宿生活から脱却して安定した居所を得

たとしても、社会的孤立の問題が解消していないこと、地域の活性化を図ることが結果的にジェントリフィケーションを引き起こし、あいりん地域に暮らし続けてきた人々の生活に負の影響を及ぼしかねないことなどの問題がある。



## 2：手法

# ”contropticon” という新概念 を用いて空間を設計する

# CONTROPTICON

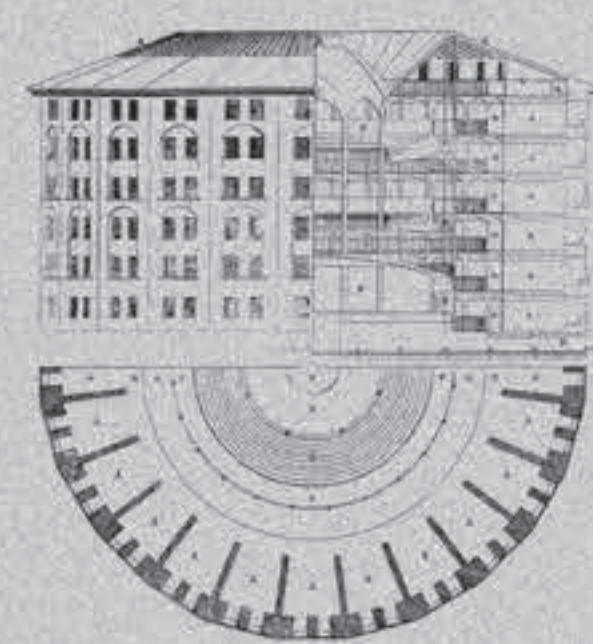
見ようとするほど  
見られているように  
感じる空間の要素

### 2.1. 定義

controption の概念はイギリスの哲学者  
ジェレミ・ベンサムによる panopticon を  
元としている。panopticon はベンサムが  
設計した刑務所施設の構想であり、ギリ  
シャ語の pan（見る）と optic（見る）、  
optikon（視覚の）を組み合わせたベンサ  
ムによる造語とされている。円形に配置  
された収容者の個室が多層式看守塔に面  
するよう設計されており、看守の位置か

らはすべての収容者を監視することがで  
きた一方で、収容者たちからはお互いの  
姿や看守が見えず、実際に看守に見られ  
ているのかどうかすらわからなかった。  
つまり、常に見られているように感じる  
という構造となっていた。一方で  
contropticon は、ラテン語の contra（逆、抗、  
反対）を接頭辞とした造語であり、見よ  
うとするほど見られているように感じる

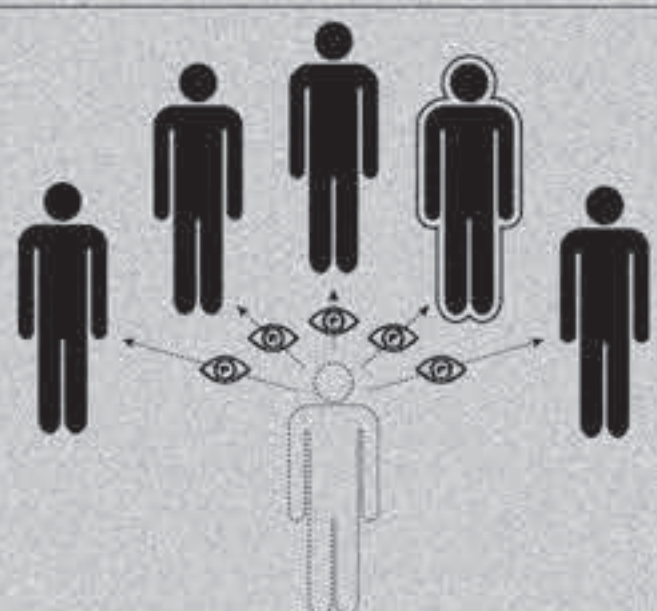
構造となっている。厳密に言えば、  
contropticon は見ようとするほど見られ  
るように感じる空間の要素である。  
contropticon の空間はひとつに定まるも  
のではなく、以下に説明する「見る－見  
られる関係の考察」と「釜ヶ崎の空間的  
要素」の組み合わせによって様々な形態  
として表れ、その集合が見ようとするほ  
ど見られているように感じる空間となる



ベンサムによるパノプティコンの構想図

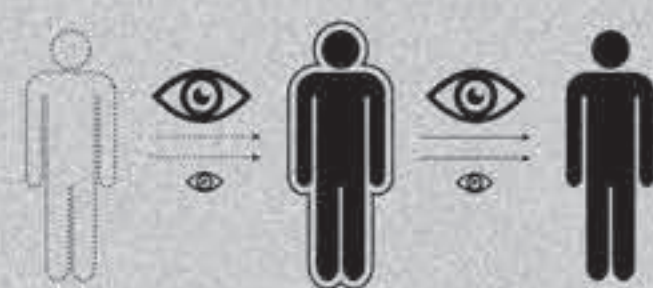
contropticon の集合が見ようとするほど見られる空間となっている  
見る－見られる関係の考察と釜ヶ崎の空間的要素を組み合わせてつくる

“panopticon”  
= ‘pan- 全て’ + ‘opticon 見る’



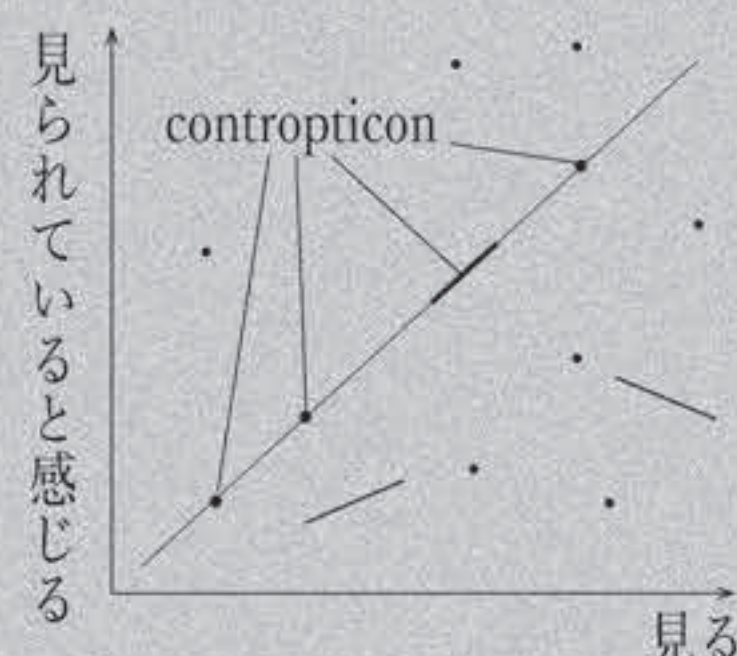
panopticon の空間構造では、見えない監視  
者から一方的に見られているように感じる

“contropticon”  
= ‘contra- 逆、抗’ + ‘opticon 見る’



contropticon の空間構造では、他者を見ようとすれ  
ばするほど逆に見られているような感覚が強まる

見ようとするほど見られる空間

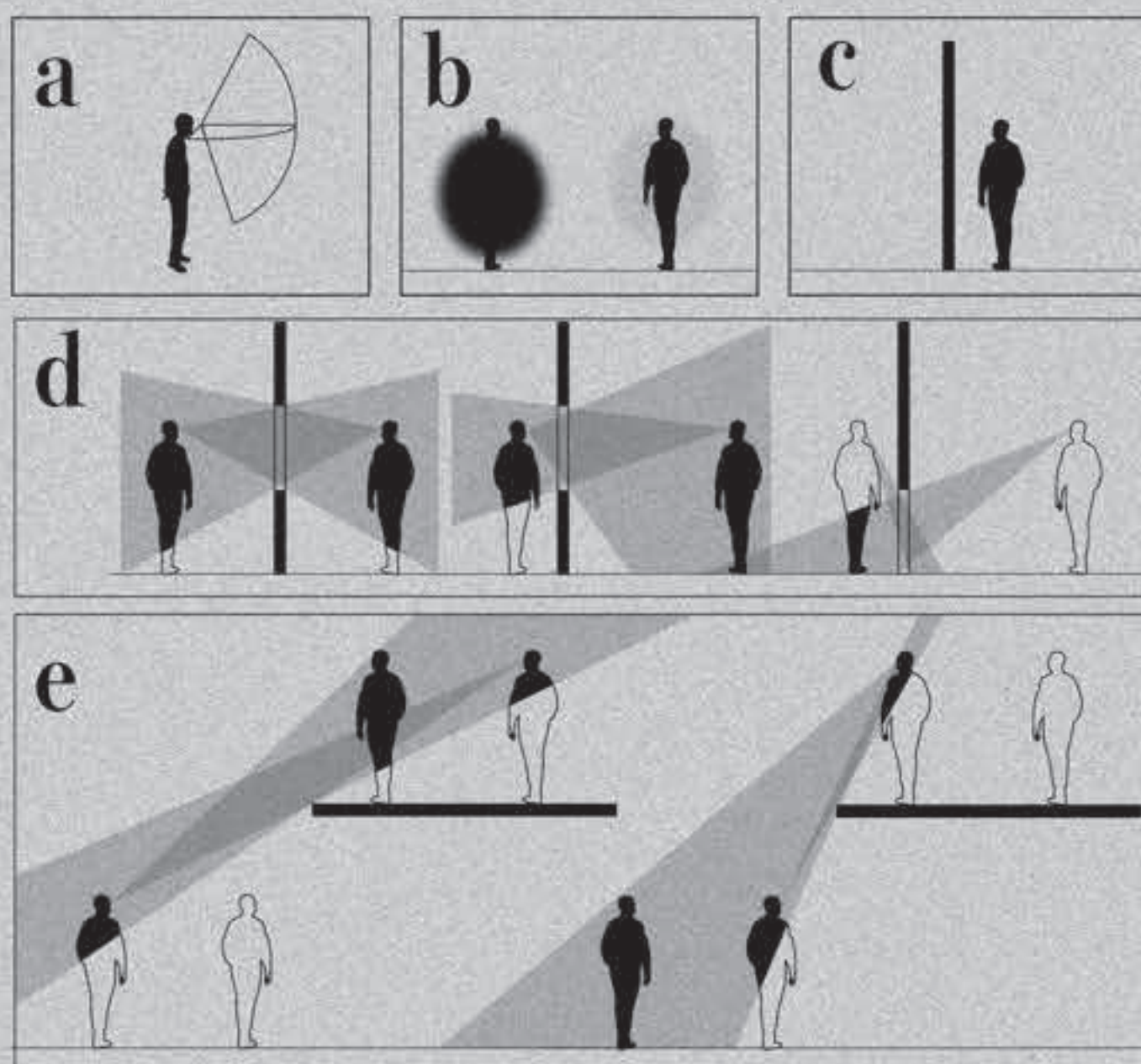


見ることと見られている感覚になることが  
正比例するような要素が contropticon である

### 2.2. 見る－見られる関係の考察

見る－見られる関係に非対称性生まれるのは、見る側と見ら  
れる側のそれぞれに物理的な条件の違いがあるからである。人間  
がほかの人間を見るとき、その主体の「見る」という機能は眼の  
位置や視野角、周囲の明るさなどによって制限される。一方その  
客体である体は、遮蔽物や暗がりがあると隠れてしまう。これら  
の非対称性を生む見る－見られる関係に関する考察は以下の a～e  
の5つになる。

### 見る－見られる関係の非対称性について



- a. 視野角 上方 60 度以上は死角に入りやすい。
- b. 明暗の差 明から暗は見づらく、逆は見られやすい。
- c. 遮蔽物（垂直、開口なし）壁に近いほど見られているように感じない。
- d. 遮蔽物（垂直、開口あり）開口に近いほど見やすく、見られにくい。
- e. 遮蔽物（水平）縁に近いほど見やすく、見られやすい。

### 2.3. 釜ヶ崎の空間的要素

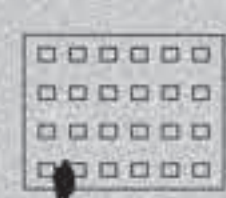
釜ヶ崎には既に、そこを訪れた人が地元の人々からの視線を感じるという状況がある。釜ヶ崎の都市空間もそれらを助長し、またその  
ような印象を与えるものとなっている。よって、釜ヶ崎の都市空間から先述の”見ようとするほど見られている気がする空間”を構成  
する要素を抽出し、これを利用して contropticon をつくる。

## 視線が潜む釜ヶ崎の都市空間

#### I. 元簡易宿泊所



#### 窓



開口のある壁やスラブのこと。自分に対して  
垂直方向に窓があるとき、見られているよう  
に感じる。内と外に明暗の差が付きやすい。

#### II. 公園



#### 舞台



2m 程度までの高さの床のこと。一般的に、  
位置が高いほど遮蔽物が少ないため、見やす  
く、見られやすくなる。

#### 広場



広範囲に遮蔽物がない空間のこと。周囲を見  
渡すことが出来るが、どこから見られてい  
るようにも感じる。

#### III. 線路

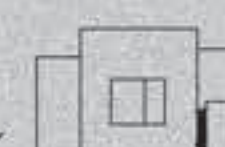


#### 高架



2m を超える高さの床のこと。高いほど死角に入り  
やすく、遮蔽物も少ないため、見やすく、見られ  
にくくなる。一方で、遠距離からは見られやすくなる。

#### 見隠れ



遮蔽物の数が多い空間のこと。遮蔽物の後ろ  
から見られているように感じる。空間の広さ  
と相関がある。

#### IV. 囲い



#### フェンス



材がまばらに立て並べられた囲いのこと。体を通り、  
視線は通す。フェンスに対する視線の角度が小さくな  
るほど透過性が下がり、見にくく見られにくくなる。

#### 塀



開口のない壁のこと。視線も体も遮る。塀の  
すぐ近くでは周囲は見づらくなるが、見られ  
ている感覚は薄まる。

#### V. 道路



#### 大通り



幅が広く、長い空間のこと。見通しが良く、  
どこから見られているように感じる。

#### 隅切り



出隅を落とした角のこと。隣り合う辺同士の  
見通しが良くなる。



# 3：プログラム

# 見る見られる関係が様々に作用する施設

見ようとするほど見られる作用は、訪れた誰に対しても平等に働き、その主体は決まってない。しかし、見られてることについての感じ方は人によって異なる。その主体が後ろめたく思っていたら抑圧的に感じられ、そうでない場合は安心へと繋がる場合もある。

## 3.1. ゾーニングと機能配置

行政から提示されている条件に沿って、労働ゾーン、多目的広場、福利・にぎわいゾーンの3つに空間を大きく分割した。主に労働に関わる機能を労働ゾーン、その他の機能を福利・にぎわいゾーンに配置し、主な利用者が同じ機能をつなぐ動線を用意した。労働ゾーンは総合事務室から全体を見渡し把握できるような配置とした。中央の多目的広場は様々な機能から見られるような配置としており、寄場として利用される早朝には求人の様子を確認することができて、高い監視性が不正やトラブルなどの抑止につながり、それ以外の時間にはこの場で行われる多様な営みを多くの人が見ることができるよう意識した。福利・にぎわいゾーンではほぼ全ての機能から多目的ホールの中が見られるようにし、託児所は見通しが良く、様々な機能から見守られるように配置した。津波などの災害時に大人数を収容することができるシェルターを地上18mの高さに配置し、普段は路上生活者が滞留・定住できる場所とした。

### ●福利・にぎわいゾーン

- ・労働やにぎわい機能と相互補完しながら、住民への助けとなる機能や住民に便利な機能などを有する施設を配置する。
- ・乗換駅や幹線道路に面しているという「地の利」のポテンシャルを発揮し、地域の新たなイメージを形成することで、来街者を含む多様な人々が訪れ、新たなにぎわい創出に資する施設を配置する。
- ・多様かつ柔軟な利活用を可能とすることで、土地の有効利用を促進するとともに、防災機能を備え、非常時の対応も可能とするような「多目的オープンスペース」の確保に努める。

### ●融合空間

- ・労働ゾーンの機能と福利・にぎわいゾーンの機能を結びつけるため、両ゾーンの間に、両ゾーンの利用者をはじめとする多様な主体が訪れ、様々な用途に用いることができる多目的広場を導入する。

### ●労働ゾーン

- ・西成労働福祉センター・あいりん労働公共職業安定所等の建替えを核にして、機能の拡充等を図ることで、多様な人が安心して暮らせる社会的包摂力を発揮できるような労働の拠点とする。

大阪府・大阪市『あいりん総合センター跡地等利活用にかかる基本構想（活用ビジョン）』より抜粋

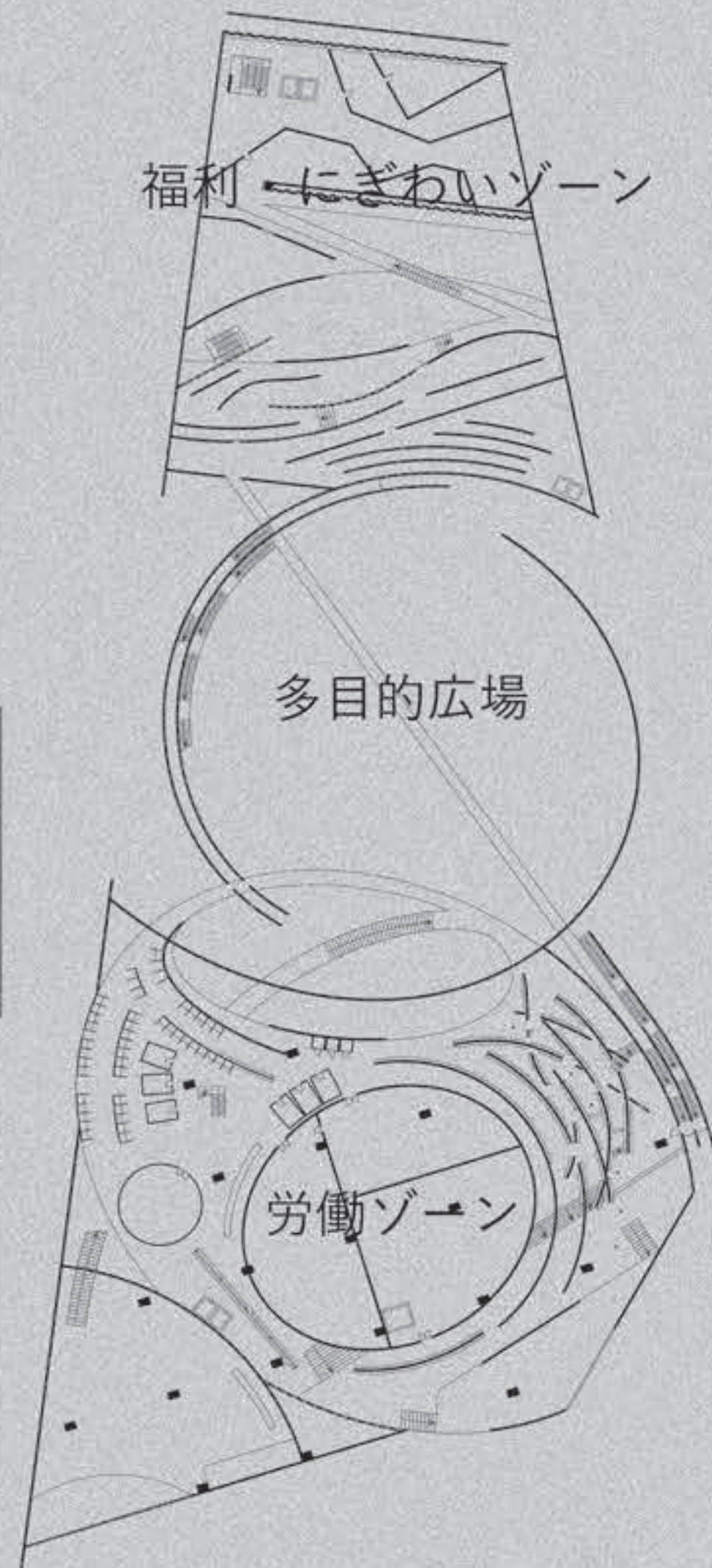
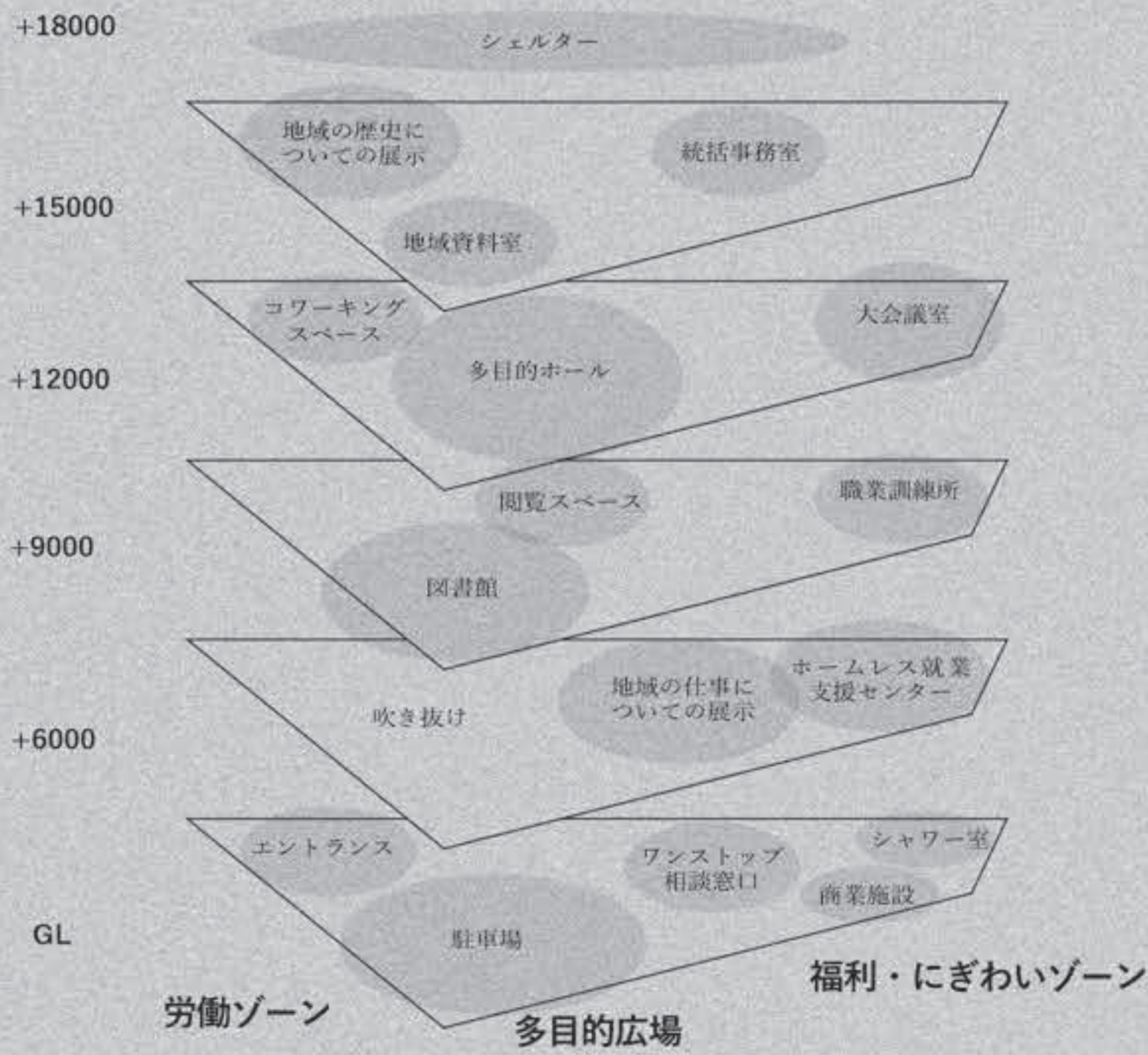


表1 西成特区構想関連テーマ別会議まとめ	テーマ1：こども・子育て関係	テーマ2：労働施設関係	テーマ3：就労福祉・健康関係	テーマ4：駅前活性化・まちづくりハウジング関係
	① 学年を問わず利用できるこどもの居場所 ＜子どもの自己実現を促すチャレンジの場＞	① 寄場機能＜待合機能、高齢化考慮、一体的で自由度が高い空間、一部24時間利用可能な開放的なスペースを確保＞	① ワンストップ相談窓口の設置 若年就労困難者、障がい者、母子世帯等各ライフステージ対応可能な窓口	① 多様な人が集う多目的オープンスペース（地域住民、駅利用者、滞在者、労働者、子ども、若者、アーティストなど）共同利用しやすいするための設備やしつらえの検討 ⇒柔軟な管理運営が必須 ⇒駅と跡地のつながりをよくする手法を検討（駅前の動向や広域政策、社会の変化にも注視）
	② 技術体験ワークショップ交流機能 ＜ICT等最先端技術やものづくりが体験できるワークショップを備えた、国際交流・世代間交流の場＞	② 駐車場機能＜求人求職活動がスムーズに行われる空間（約50台）／屋根付き駐車場：乗車容易な駐車枠＞	② 会議室	② 各機能における相互利用を検討（空間的・機能的）
	③ 地域の仕事の見える化と地域学習の連携 ＜建設建築・日雇労働を学ぶ区のパイロットエリア＞	③ ワンストップ相談窓口＜高齢者・女性・若者・外国人など多様な相談機能、仕事出し、職場紹介など＞⇒一般ハローワークと連携	③ 図書施設・コミュニティライブラリー（全世帯向け）	③ コワーキングスペース、図書館（コミュニティライブラリー）、アーカイブの設置
	④ ワンストップ相談窓口＜こども・子育て、就労福祉、労働相談、就労・生活支援・専門家を配置＞	④ ホームレス就業支援センターの移設	④ コワーキングスペース 各自独立して仕事を行う方々が共有する、事務所・会議室・打ち合わせなどのためのスペース	④ まちの生活者に対するハウジング（滞留・暫居・定住を意図） ⇒他テーマ関連会議で出されたハウジングの展開
	⑤ 上記機能を促す空間 図書施設、コワーキングスペース、園芸・屋上農園など	⑤ 職業訓練（技能習得）機能・「仕事」の見える化 ＜職人の育成や興味づけのための建設・建築トレーニングセンターまたは西成版キッズシアター機能＞	⑤ 防災機能	
		⑥ 利用者の福利厚生機能＜会議室・シャワー・売店・託児所など＞		
		⑦ オープンスペース＜防災＋多目的ホール機能＞		

大阪府・大阪市『あいりん総合センター跡地等利活用にかかる基本構想（活用ビジョン）』より抜粋

日雇い労働者・路上生活者	その他住民や職員	外部の人間
多目的広場		
多目的ホール	多目的ホール	
相談窓口	相談窓口	
ホームレス就業支援センター		
	コワーキングスペース	コワーキングスペース
職業訓練所		地域の仕事を学ぶ場 地域の歴史等の伝承
図書施設	図書施設	図書施設
売店	商業施設	商業施設
シャワー	会議室	会議室
	事務所	事務所
	託児所	託児所

利用者の分類と機能の対応図



機能の配置図

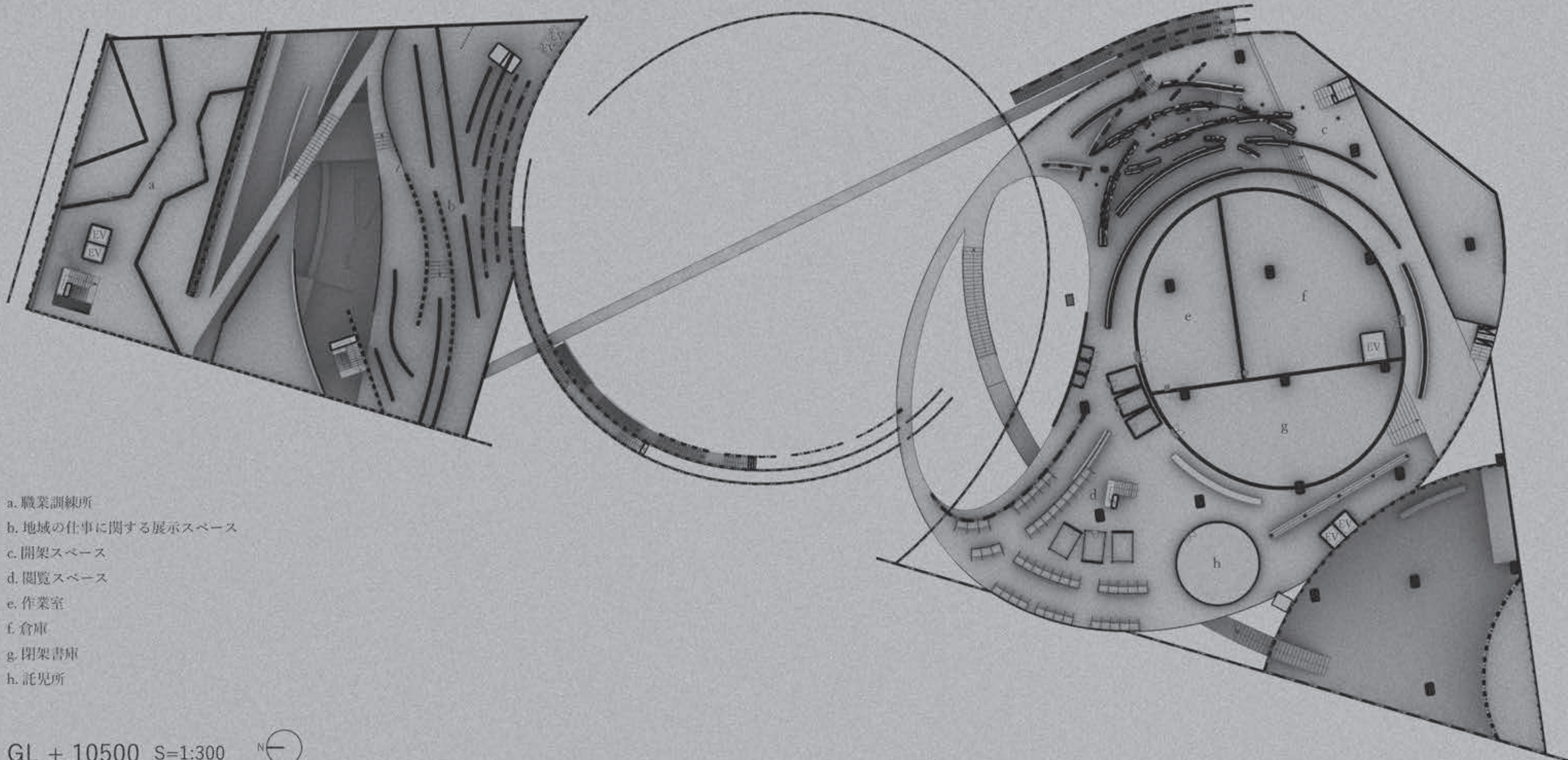
## 3.2. 敷地との関係

敷地西側は南海電車の車窓から見下ろされる位置関係になっており、北側は駅や大通りの観光客からの好奇の視線にさらされることが多いため、それらに対して建物の中から見られていると感じるような外観とした。また、建築の中から釜ヶ崎の街を見るときなど、建築内外の境界面でも見ようとするほど見られるように感じる関係が成り立つようにした。



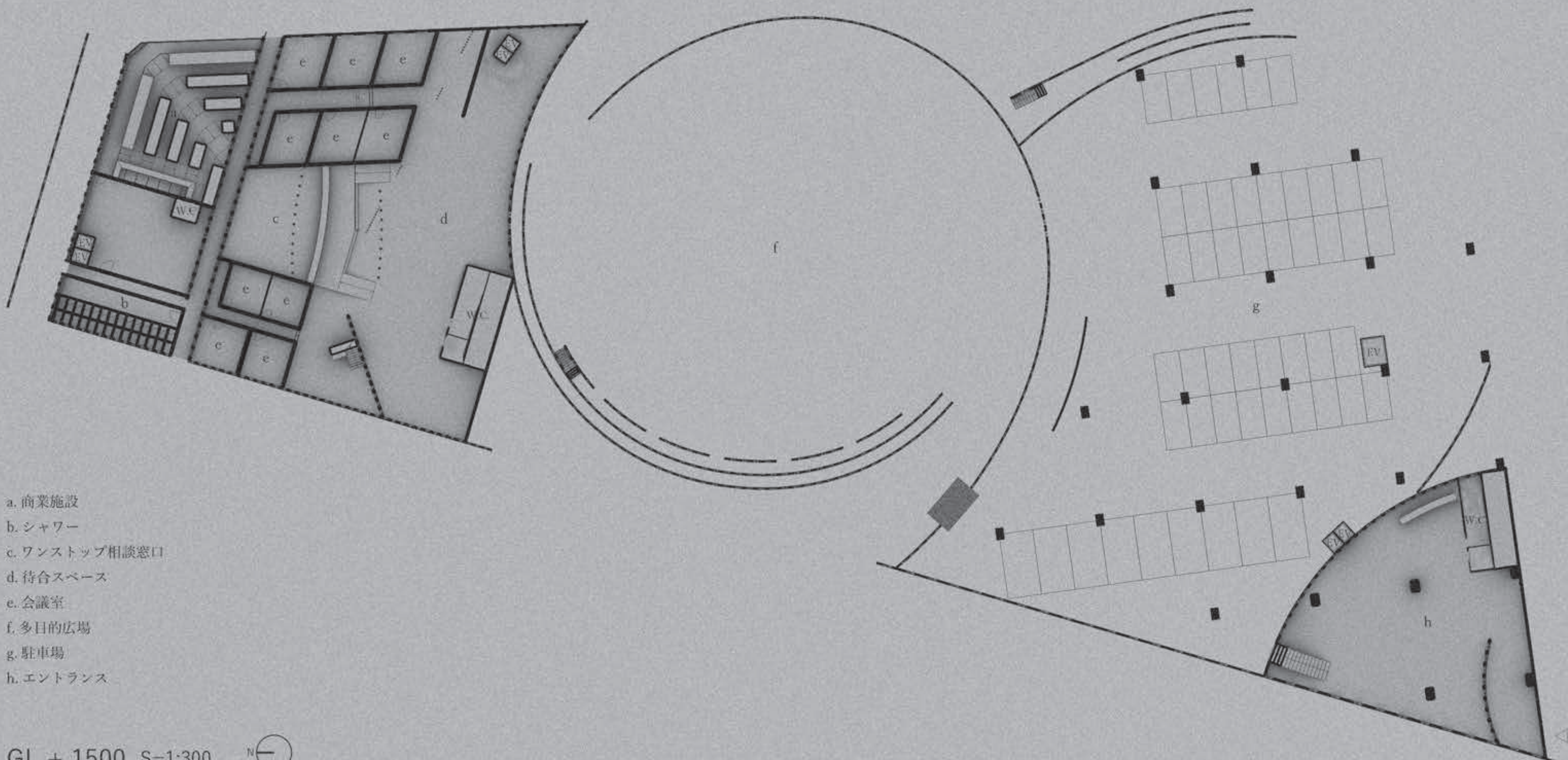
あいりん総合センターと周辺地図





- a. 職業訓練所
- b. 地域の仕事に関する展示スペース
- c. 開架スペース
- d. 閲覧スペース
- e. 作業室
- f. 倉庫
- g. 開架書庫
- h. 託児所

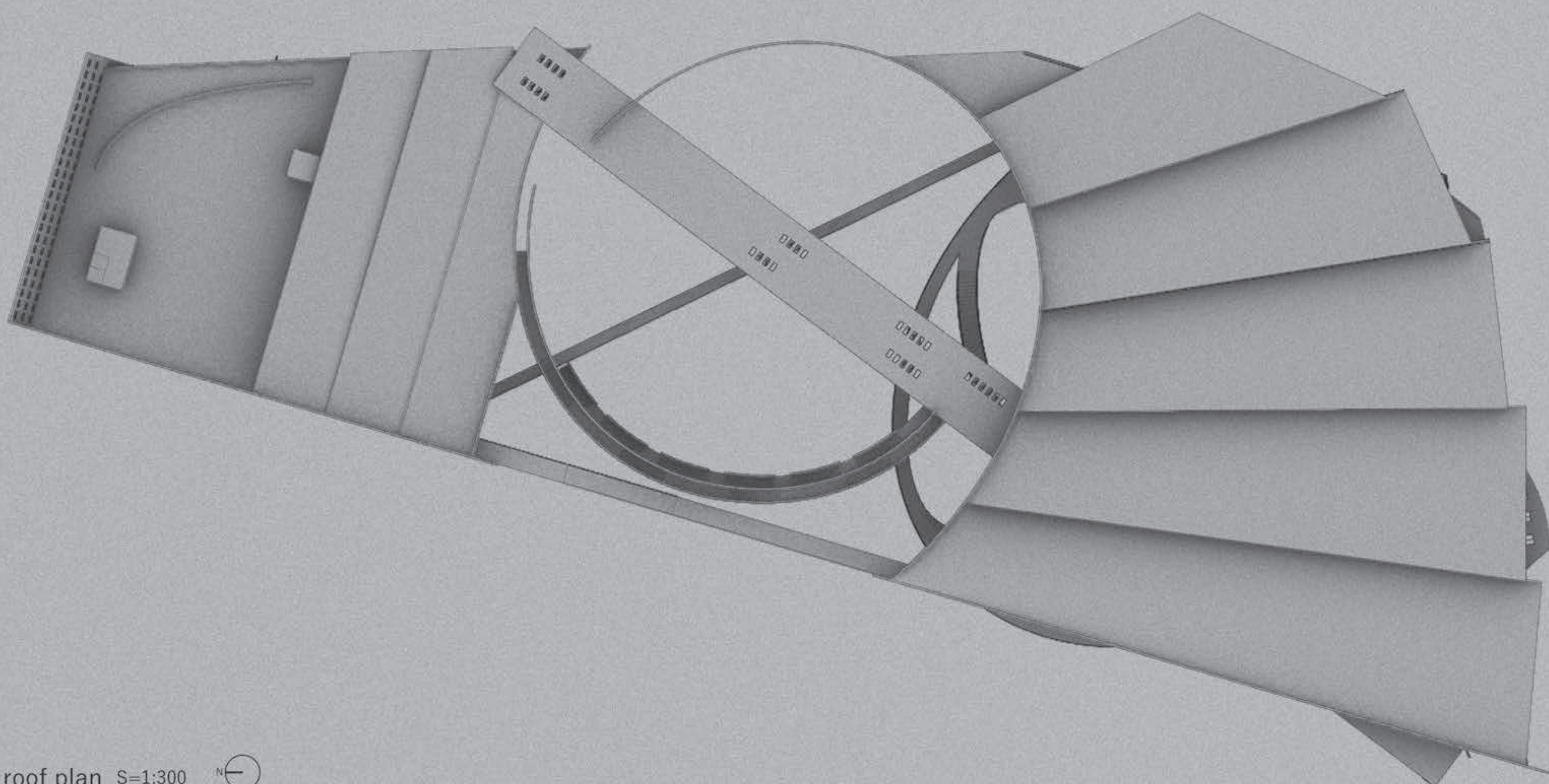
GL + 10500 S=1:300



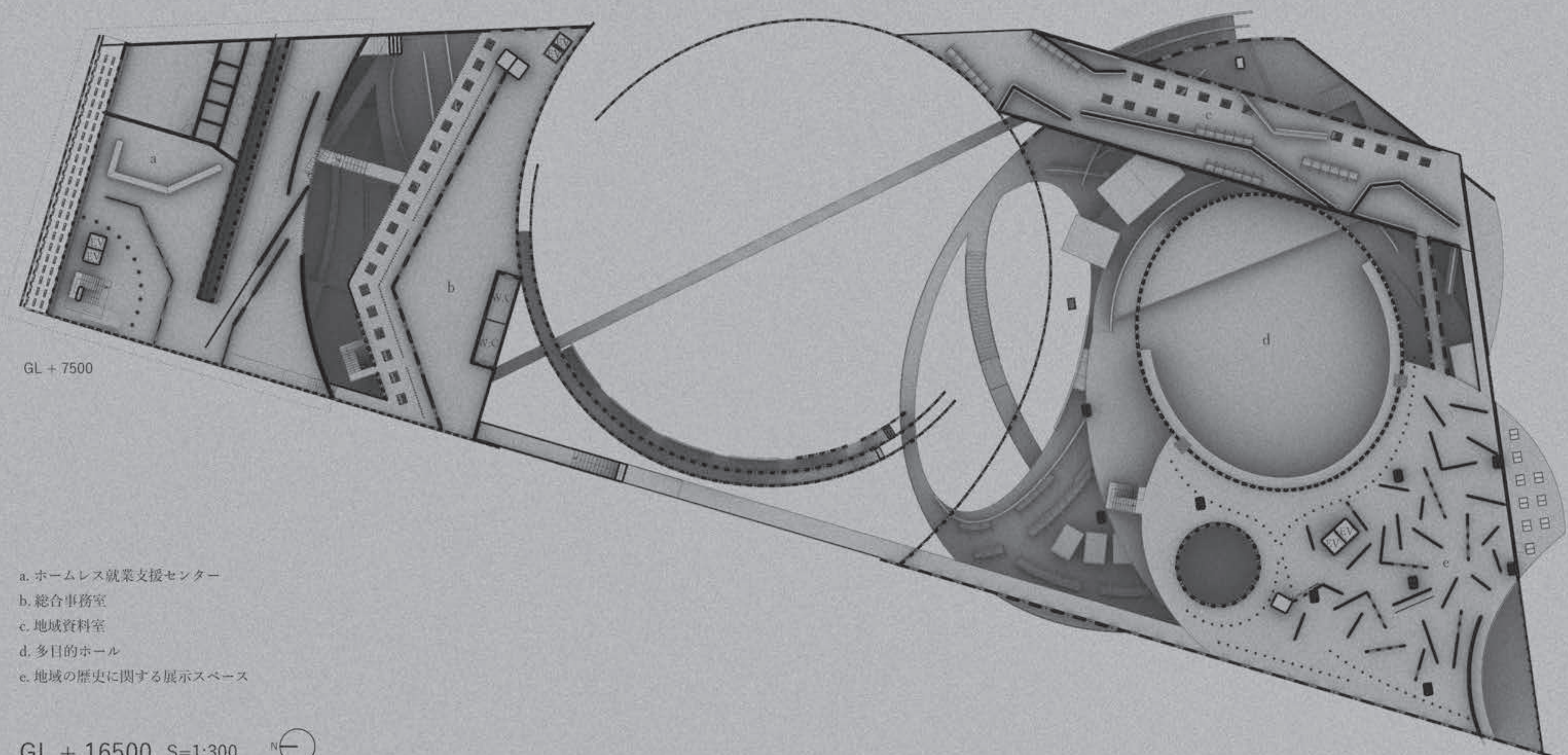
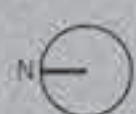
- a. 商業施設
- b. シャワー
- c. ワンストップ相談窓口
- d. 待合スペース
- e. 会議室
- f. 多目的広場
- g. 駐車場
- h. エントランス

GL + 1500 S=1:300





roof plan S=1:300



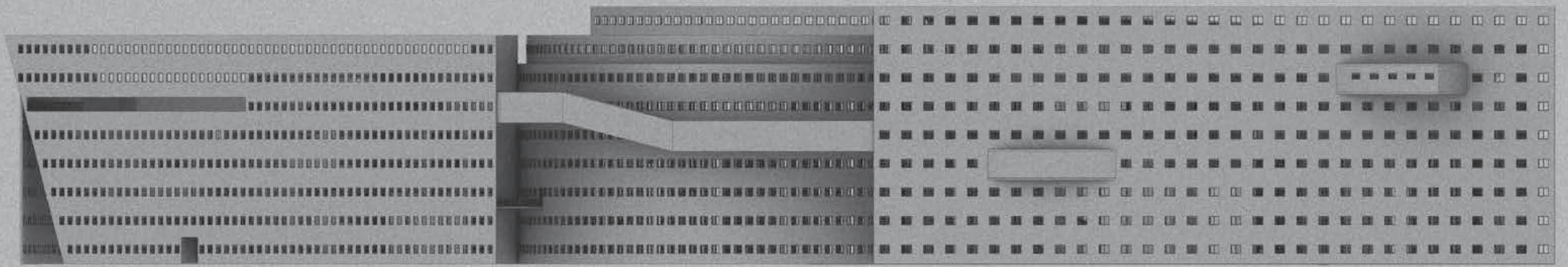
GL + 7500

- a. ホームレス就業支援センター
- b. 総合事務室
- c. 地域資料室
- d. 多目的ホール
- e. 地域の歴史に関する展示スペース

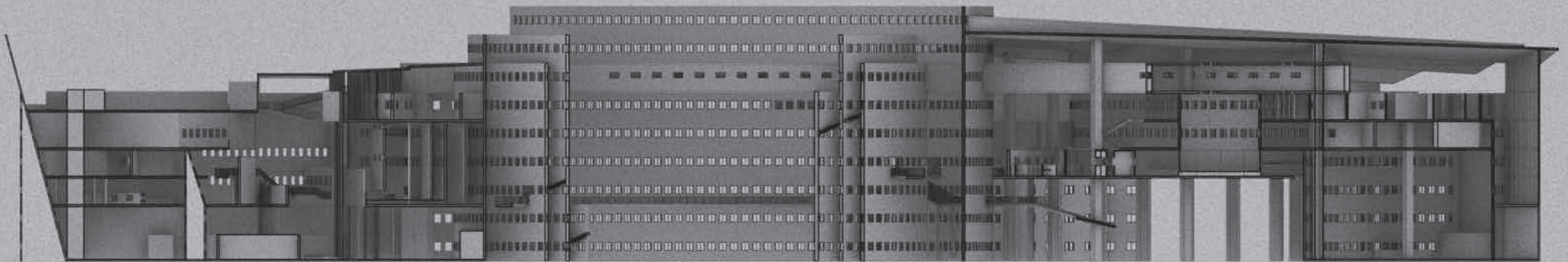
GL + 16500 S=1:300







west elevation S=1:300



section S=1:300

